

第36回Kozoom28 テーマ「私の心に残る風景」

清水健二

人は日常生活の中で様々な風景に出会いながら生きている。世界自然遺産の美しい風景に出合ったり、見ず知らずの人に助けられる一期一会の光景に感動することもあり、私など同年代の人などは忘れられない戦争の凄惨な風景など枚挙に暇がないほど思い出す。今回、私が書いてみたい心に残る風景は、心癒される日本の原風景のことを取り上げてみたいと思う。

私が社会人になり、仕事上各地に出かけることが多かったことから、その地の自然風景や生活文化に触れることで様々な刺激を受けながら教えられることが多々あった。ところが在住している大阪や近隣の京都、奈良はよく知っていると思いながら、深く勉強することがなかった。例えば高校の国語の時間に勉強した万葉集(国文学者・澤潟久孝監修の教科書)は、かすかに頭に残っているが、万葉歌は各地で詠まれ、その数からみて奈良・大和路は圧倒的に多いのに、場所や歴史的背景も知らずにいた。万葉集の世界のみならず、日本古代の史跡を自分の足で訪ね、勉強してみようと、現役の頃から徐々に歴史書や歴史小説家・永井路子(1925～1923)や黒岩重吾(1924～2003)など歴史の宝庫である飛鳥時代を書いた本を好んで読んだ。少しずつ万葉歌の大らかな情感や、生々しい情念を素直に詠い上げ、喜怒哀楽を率直に表現する万葉時代の生活文化に感銘を受けた。1500年も昔の人たちの言葉から、日本人は人間性において進化してきたのだろうかと思ってしまうことがしばしばあった。

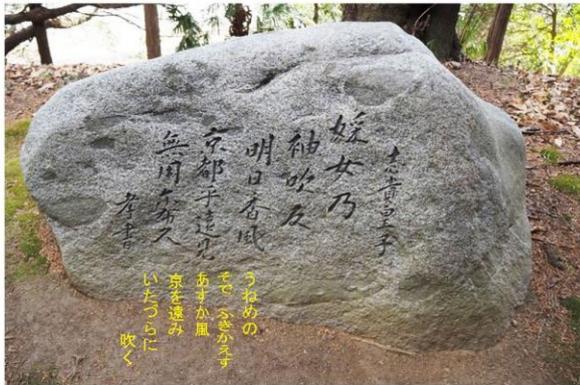
万葉の歌の詠まれた場所への探訪の旅を楽しみにして歩きだして実感したが、特に奈良県明日香村は古墳時代から飛鳥時代にかけて遺跡が多く残っていて、京都のように観光化されていないことや、歴史的建造物保存地域として厳しい規制もあって、鄙びた佇まいはタイムスリップしたかのように、山河は万葉の頃と変わらない風景をとどめている。訪ねる度にますます気に入ってききたのである。高層ビルもなく、商業用の看板も見当たらず、日本の美しい景観に触れ私の心は癒やされたものである。

その背景には、古都飛鳥の景観保存に精力的に尽力した、国文学者・犬養孝(1907～1998)氏の存在は大きい。多くの万葉ファンを創出し、朗々と犬養節で万葉歌を詠唱しながら一般人の教養向上にも努めた。飛鳥全域のみならず、古代から神山と崇められていた三輪山の麓を通る古代の道、「山辺の道」にも、著名な文化人の筆による万葉歌碑を建立しその



飛鳥の景観の写真を基に地名の説明図

数は100基を超えるだろう。氏の功績を称えて明日香村に「犬養万葉記念館」(2000年)が完成している。



万葉歌碑 (犬養孝筆)



万葉歌碑 (川端康成筆)

写真家・入江泰吉(1905~1992)氏は奈良の文化遺産や仏像を撮影し、また万葉歌の詠まれた場所で心象的な写真を撮りつづけて紹介している。私も氏の写真に魅せられて、万葉の地を辿ることを楽しみにカメラを手にガイドブックを頼りに歌人の足跡を探し回って来た。今も飽きることもなく四季折々に訪ね続けている。

河内や大和に根を張っていた物部氏が、仏教を中心に大陸文化を取り入れた蘇我氏との戦いに破れ、蘇我氏の天下になったが、やがて大化改新(645)を断行した中大兄皇子(後の天智天皇)と中臣鎌足(後の藤原鎌足)によって蘇我氏王国は滅亡した。日本が律令国家を樹立した飛鳥時代は、明日香村の飛鳥寺を中心に展開しているが、山に囲まれた盆地は、掘れば遺跡の出でくる度に歴史の厚味を感じさせる所である。

飛鳥寺の東北約1km離れた所に山田寺跡があり、蘇我氏討伐の功労者である倉山田石川麻呂の拠点だった。しかし讒言にあい非業の最後を遂げている。血で血を洗う当時の政争は凄まじいものだったと思う。この寺の東の丘へ私はよく登って小高い山々に囲まれた古都飛鳥の景色を眺め、遠くに葛城山と金剛山が連なる雄大な風景に、当時の人たちと同じ気持ちを抱いたものである。まさに「大和は国のまほろば たたなずく青垣 山ごもれる大和し うるわし」である。



飛鳥の景観

特に西に向かって広がるパノラ

マ風景は落日の時間帯が実に美しい。古代から人々が西方浄土を想像したことが実感させられる。そして夕方5時になると、時報の有線放送が明日香村全域に流れ、「平城山(ならやま)」の曲が哀愁を帯びて物悲しくこだまする。「人恋うは悲しきものと ならやまは・・・」に始まる平井康三郎の曲である。歌人・会津八一氏が「春浅き山村の、夕暮れは淋しい」とこの地の光景を表現している。私も春夏秋冬、幾度となく足を運び、眼下の山田寺跡の先に八釣(やつり)の大和棟を残す家並を眺めながら、広大な山のうねりに中で悠久の美を感じてきた。

心に残る飛鳥の風景について、もう一つ紹介しようと思う。蘇我馬子の古墳として知られている石舞台から、飛鳥川を遡って約2kmほど行くと、南淵(みなぶち)という集落がある。遣隋使として留学した南淵請安氏の墓があり、氏は前述した大化改新のブレーンとして、中大兄皇子や中臣鎌足のクーデターを指南したという。ここから更に約2km行くと栢森(かやのもり)の集落に入る。栢森から芋峠を超えて吉野に入り、女帝・持統天皇がよく吉野離宮に下った道である。栢森から横道に逸れ約1km山道を登ると、入谷(にゅうだに)という集落に至る。私が初めてここを訪ねた時、山の中腹から山頂に向かって10数軒の家が山に張り付いたように建っていたのが印象に残っている。その10数軒の中に飼犬がいて、私が山道を登り村に入って行くのを見つけたのであろう。吠える声が山合いにこだまして驚いたが、「誰かが登ってきたぞ」と知らせる役を果たしていた番犬だった。段々畑で働いていた老婆に、私は挨拶すると怪しい奴でないと知ったのか、その犬は吠えるのを止めこだまが消え静けさが戻った。



奥飛鳥・入谷の家



奥飛鳥・入谷の一軒家



入谷の地藏寺

家々の一番上手に小さな寺・地藏寺と社・大仁保神社があった。村の守り社寺であろう。私は更に高みに登り一軒の家を見つけた。かまどから立ち上る煙にこんな山深いところで生活する人の健気さに感動した。以来私は何故かこの入谷が気に入って、その後しばしば訪ねている。そしてカメラを向け日本の原風景を撮り続けてきた。地藏寺を俯瞰して、寒い吹雪の日に撮った写真を、「万葉の大和路・写真コンテスト」に応募し入江泰吉賞を受賞した思い出がある。

激しい政争の飛鳥時代でも、人々は自然を愛で、情感あふれる歌を詠んだ古代の人々の心にロマンを感じ、飛鳥は日本人の心のふるさとだと私は思っている。

「春やなぎ 葛城山に 立つ雲の 立ちてもいても 妹をしぞ思う」の素朴な歌に、飛鳥の地のどこからでも眺望できる二上山から南に続く葛城連峰は、四季を通じ秀麗で人恋しい想いをさせる。そんな風景から私は少なからず感性を養われたと思っている。

令和5年6月記